

【目次】

研究発表（1）レジュメ（佐々木隆治氏）	2 頁
研究発表（2）レジュメ（御園敬介氏）	3 頁
第7回学会発表まとめ（小谷英生氏）	4 頁
第7回学会発表まとめ（小川勝氏）	5 頁
大河内泰樹先生の自己紹介	7 頁
総会・幹事会報告	8 頁

研究発表（1）

マルクスにおける労働と自由

佐々木 隆治（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

カール・マルクスにおける労働と自由について報告したい。この主題については哲学・思想の立場からすでに様々なことが論じられてきたが、マルクスの基本的な経済学的カテゴリーの批判の意義が踏まえられない場合は多くなかった。端的に言えば、物象化と物象の人格化の一契機としての近代的私的所有論の意義の理解が不鮮明なままに、初期と経済学批判期の言説から任意に抽出して「理論」を構成するというやり方が一般的であった。本報告では、物象化論および所有論の正確な理解にもとづいて、マルクスの労働論およびそれと関連する限りでの自由論について考察したい。

なお、労働と自由の関連という問題では次の三点がポイントとなることをあらかじめ指摘しておく。

第一に、近代的労働と前近代的労働の差異である。マルクスは労働の超歴史的な抽象的な特徴についてたびたび言及するが、労働形態の歴史性を浮かび上がらせるところにあった。この差異に着目することで、むしろ前近代およびポスト近代における自由の共通性をマルクスが強調していたことが示されよう。

第二に、労働過程そのものにおける自由である。この問題については、資本のもとへの労働の実質的包摂の議論が決定的に重要になる。

第三に、労働過程の外部での自由である。これについては「自由時間論」として有名であるが、これを物象化および形態的包摂論との関連で捉えなおさなければならない。